

教育の本質と学習主体との関連に関する考察：
宮原誠一『学校と社会』の教育思想を巡って

枝元 益祐

学習者の主体性とその学習支援を前提として、図書館サービスをその中心とする図書館活動の諸側面についての近接領域を毎回紹介しています。今回は、宮原誠一著作『教育の本質』（1949年）、及び、『経済と教育』（1950年）を下敷きにして、行政施策としての教育政策と学問としての教育学との関連性に関して言及しました。

宮原誠一の論理展開を支える前提の認識は、「人間の物質的生活条件と人間の精神や性格とを切り離そうとする」観念論を批判し、社会的生活そのものによる人間の形成を主張したことです。

ところで、この宮原誠一は、当時の東京大学教育学部で社会教育講座を担当する「社会教育学者」です。その宮原誠一が翻訳した書籍で恐らく一番有名であるのが、ジョン・デューイ（J.Dewey）の著作である『学校と社会（The School and Society）』（邦訳：岩波書店、1957年）であるということが出来ます。この『学校と社会』はJ.Deweyが、シカゴの実験学校で行った子どもを対象とした「学校教育」の範疇での取り組みを報告した有名な著書で、社会教育分野ではなく、寧ろ、学校教育分野で取り上げられる著作であることは言うまでもないことでしょう。

では何故、社会教育学者の宮原誠一が学校教育分野の著作の翻訳を手がける必然性があったのでしょうか。

そもそも、日本の現代教育における施策の発端は、1946年の第1次訪日アメリカ教育使節団報告書にまで遡ることが出来ます。この報告書においては、「カリキュラムを構成する校内の経験は、生徒たちの校外の経験と密接な関係を持たせなくてはならぬ」として地域社会の実態に即したカリキュラムの編成が強調されました。

そして1950年に発表された第2次訪日アメリカ教育使節団報告書では、「図書館用書籍並びにその他の教材が各学校に適切に備えられるべきである。学校図書館は単に書籍ばかりではなく、日本人の、あの稀に見る芸術的才能をもって教師と生徒が製作した資料を備えるべきである。」と謳われており、併せて「教材センターとしての学校図書館は、生徒を援助し指導する司書を置いて、学校の心臓部となるべきである。」とも言及されています。

当時のアメリカでの教育トレンドであった経験主義教育を基調として、J.Deweyは、学校教育における「心臓部・中心部（the heart of school）」である学校図書館の位置付けとして「メディアセンター論」を展開しました。これは、社会の縮図である学校生活という経験の中心的活動フィールドとして学校図書館が想定されているものです。換言すると、『学校と社会（The School and Society）』の中でJ.Deweyが主張したことは、「学校は地域社会の縮図」であると同時に、「学校図書館は学校教育の縮図」であり、そのように社会での生活や経験に対して、学習活動の拠点となるような機能を果たす学校図書館の在り方を「メディアセンター」と位置付けたのです。

この『学校と社会The School and Society』の翻訳者である宮原誠一の言葉を借りるならば、その経験を拡張すべく「学習の必要に応じて書物、映画、ラジオなどコミュニケーションのさまざまな手段が使用され、図書館、博物館、動物園、植物園などはもとより、研究所、工場、農場、病院、劇場などさまざまな社会機関が利用されるようなメディアセンター構想が展開されることがその念頭に置かれているということが出来ます。

J.Deweyは、初等中等教育をその範疇に『学校と社会The School and Society』を記しましたが、ここで提示された学校での教育及び学習活動全体の中での図書館の役割とその位置付けとしての「メディアセンター構想」は、初等中等教育に留まることなく、大学での高等教育でもその理念が貫かれているからこそ、社会教育学者の宮原誠一が翻訳をするに適任であったということが出来ます。

現実に、欧米の大学では、キャンパスの真ん中に図書館があり、そこから放物線を描くように各学部塔が配置されているケースが多いです。これは物理的な図書館及び資料へのアクセスのみならず、利用者としての使い勝手の良さ（ユーザビリティ）も教育及び学習活動に大きな位置を占めていることの現れであるということが出来ます。

えだもと ますひろ（准教授・図書館学・教育学）